

③ 次は、夏目漱石の作品『吾輩は猫である』の本のカバーに書かれている【紹介】と、「文章の一部」です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【紹介】

中学教師の苦沙弥先生の家で暮らす猫「吾輩」から見れば、世の中は全くもって滑稽そのもの。周囲の様子を観察し、様々に評価する。ユーモアあふれる長編小説である本作は、漱石が三十八歳のときに発表して以来、多くの読者に愛されてきた。今なお、多くの人の共感を呼ぶ名作。



【文章の一部】

「ここまでのあらずし」 苦沙弥先生の家で暮らすことになった猫の「吾輩」は、ある日、家の裏にある茶壺ちやぼたけで黒猫の「黒」と出会う。「黒」は大きな体格で、車屋（人力車を引く人）に飼われている乱暴猫である。それ以来、「吾輩」はたびたび「黒」に出くわすようになる。

ある日、例のごとく吾輩と黒は暖かい茶壺の中で寝ころびながら、いろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうにくりかえしたあとで、吾輩に向かって下のごとく質問した。

「おめえはいままでに鼠を何びきとつたことがある。」

智識は黒よりもよほど発達しているつもりだが、腕力と勇気とにいたってはとうてい黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問いに接したときは、さすがにきまりがよくはなかった。けれども事実は事実で、いつわるわけにはゆかないから、吾輩は、

「実はとらうと思うって、まだとらない」と答えた。

黒は、彼の鼻の先からびんとつつばっている長いひげをびりびりとふるわせて、非常に笑った。元来黒は自慢をするだけにとどこ足りないところがあって、彼の気焰を感じたようにのどをこるころ鳴らして謹聴していれば、はなはだ御しやすい猫である。吾輩は彼と近づきになってからすぐにこの呼吸①のみこんだから、この場合にも、なまじいおのれを弁護してますます形勢を悪くするのも愚である、いっそのこと彼に自分の手柄話をしゃべらしてお茶をにごすにしくはないと、思案を定めた。そこでおとなしく、

「君などは年が年であるから、だいふんとつたろう」と、そそのかしてみた。

※ 問題は、次のページに続きます。

果然彼は、牆壁の欠所に吶喊して来た。

「たんとでもねえが、三、四十はとつたるう」とは、得意気なる彼の答えであった。彼はなお語をつづけて、「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いたちつてえやつは手に合わねえ。一度いたちに向かつて、ひどい目にあつた。」

「へえ、なるほど」と、あいづちをうつ。

黒は大きな眼をばちつかせて、いう。

「去年の大掃除のときだ。うちの亭主が石灰の袋を持って縁の下へはいこんだら、おめえ、大きないたちの野郎がめんくらつて飛びだしたと思ひねえ。」

「ふん」と感心して見せる。

「いたちつてけども、なに、鼠のすこし大きいぐれえのものだ。こんちきしょうつて気で追っかけて、とうとうどぶの中へ追いこんだと思ひねえ。」

「うまくやったね」と喝采してやる。

「ところがおめえ、いざつてえ段になると、やつめ最後っ尻をこきやがつた。くせえのくさくねえのつて、それからつてえものはいたちを見ると胸が悪くならあ。」

彼はここにいたつて、あたかも去年の臭気を今なお感ずることく、前足をあげて鼻の頭を二、三べんなでまわした。吾輩も少々気のどくな感じがする。ちつと景気をつけてやろうと思つて、

「しかし鼠なら、君にいらまれては百年目だろう。君はあまり鼠をとるのが名人で鼠ばかり食うものだから、そんなにふつとて色つやがいいのだろう。」

黒のごきげんをとるためのこの質問は、ふしぎにも反対の結果を呈出した。彼は喟然として大息していう。

「考げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——いつてえ人間ほどふてえやつは世の中にいねえぜ。人のとつた

鼠をみんな取りあげやがつて、交番へ持つてゆきあがる。交番じゃ、だれがとつたかわからねえから、そのたんびに五錢ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか、おれのおかげでもう一円五十錢くらいもうけていやがるくせに、ろくなものを食わせたこともありやしねえ。おい、人間でものあ体のいい泥棒だぜ。」

さすが無学の黒もこのくらいの理屈はわかるとみえて、すこぶるおこつたようすで背中を逆だてている。吾輩は少々気味が悪くなったから、いいかげんにその場をこまかして、うちへ帰つた。

このときから吾輩は、けつして鼠をとるまいと決心した。しかし、黒の子分になつて鼠以外のごちそうをあさつてあるくこともしなかつた。ごちそうを食うよりも寝ていたほうが気楽でいい。

【夏目漱石『吾輩は猫である(上)』(1906年7月 偕成社)による。】

(注1) 気焰＝燃え上がるような盛んな意気。

(注2) 御しやすい＝思うように扱いやすい。

(注3) お茶をにごすにしくはない＝こまかすのが最もよい。

(注4) 果然彼は、牆壁の欠所に吶喊して来た＝ここでは、予想どおり「黒」が誘いに勢い込んで乗ってきた、ということ。

(注5) 喟然として大息して＝ため息をついて嘆いて。

(注6) 交番へ持つてゆきあがる＝当時は、公衆衛生上、鼠退治を奨励し、とつた鼠を交番で買い上げた。

※ 問題は、次のページに続きます。

一 ― 線部①「呼吸をのみこんだ」とありますが、この部分の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 コツをつかんだ。
- 2 息を吸い込んだ。
- 3 ため息を抑えた。
- 4 発言を我慢した。

解答欄

--

二 ― 線部A「喝采してやる」、線部B「とった」のそれぞれについて、「吾輩」の動作である場合は1、「黒」の動作である場合は2、「亭主」の動作である場合は3を選びなさい。

解答欄

A	B
① 吾輩	① 吾輩
② 黒	② 黒
③ 亭主	③ 亭主

三 ― 線部②「反対の結果を呈出した」とありますが、このことは「黒」のどのような様子から分かりますか。【文章の一部】の中から探し、抜き出さない。

解答欄

--

※ 問題は、次のページに続きます。

四 【紹介】に〰線部「様々に評価する」とありますが、【文章の一部】では、「吾輩」は「黒」をどのように評価し、どのような接し方をしていますか。また、あなたは、そのような「吾輩」の接し方をどう思いますか。次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 【文章の一部】から、「吾輩」が「黒」を評価している表現を引用した上で、「吾輩」が「黒」にどのような接し方をして
いることが分かるのかを書くこと。

条件2 条件1のような「吾輩」の接し方について、あなたの考えを具体的に書くこと。

※ 左の枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。

--	--	--	--	--

解答欄

--	--	--	--	--

③ 次は、夏目漱石の作品『吾輩は猫である』の本のカバーに書かれている【紹介】と、「文章の一部」です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【紹介】

中学教師の苦沙弥先生の家で暮らす猫「吾輩」から見れば、世の中は全くもって滑稽そのもの。周囲の様子を観察し、様々に評価する。ユーモアあふれる長編小説である本作は、漱石が三十八歳のときに発表して以来、多くの読者に愛されてきた。今なお、多くの人の共感を呼ぶ名作。



【文章の一部】

「ここまでのあらずし」 苦沙弥先生の家で暮らすことになった猫の「吾輩」は、ある日、家の裏にある茶壺ちやぼたずで黒猫の「黒」と出会う。「黒」は大きな体格で、車屋（人力車を引く人）に飼われている乱暴猫である。それ以来、「吾輩」はたびたび「黒」に出くわすようになる。

ある日、例のごとく吾輩と黒は暖かい茶壺の中で寝ころびながら、いろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうにくりかえしたあとで、吾輩に向かって下のごとく質問した。

「おめえはいままでに鼠を何びきとつたことがある。」

智識は黒よりもよほど発達しているつもりだが、腕力と勇気とにいたってはとうてい黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問いに接したときは、さすがにきまりがよくはなかった。けれども事実は事実で、いつわるわけにはゆかないから、吾輩は、

「実はとらうとらうと思つて、まだとらない」と答えた。

黒は、彼の鼻の先からびんとつばつている長いひげをびりびりとふるわせて、非常に笑った。元来黒は自慢をするだけにとどこか足りないところがあつて、彼の気焰を感じたようにのどをこるころ鳴らして謹聴していれば、はなはだ御しやすい猫である。吾輩は彼と近づきになってからすぐにこの呼吸①のみこんだから、この場合にも、なまじいおのれを弁護してますます形勢を悪くするのも愚である、いっそのこと彼に自分の手柄話をしゃべらしてお茶をにごすにしくはないと、思案を定めた。そこでおとなしく、

「君などは年が年であるから、だいふんとつたろう」と、そそのかしてみた。

※ 問題は、次のページに続きます。

果然彼は、牆壁の欠所に吶喊して来た。

「たんとでもねえが、三、四十はとつたるう」とは、得意気なる彼の答えであった。彼はなお語をつづけて、「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いたちつてえやつは手に合わねえ。一度いたちに向かつて、ひどい目にあつた。」

「へえ、なるほど」と、あいづちをうつ。

黒は大きな眼をばちつかせて、いう。

「去年の大掃除のときだ。うちの亭主が石灰の袋を持って縁の下へはいこんだら、おめえ、大きないたちの野郎がめんくらつて飛びだしたと思ひねえ。」

「ふん」と感心して見せる。

「いたちつてけども、なに、鼠のすこし大きいぐれえのものだ。こんちきしょうつて気で追っかけて、とうとうどぶの中へ追いこんだと思ひねえ。」

「うまくやつたね」と喝采してやる。

「ところがおめえ、いざつてえ段になると、やつめ最後つ尻をこきやがつた。くせえのくさくねえのつて、それからつてえものはいたちを見たと胸が悪くならあ。」

彼はここにいたつて、あたかも去年の臭気を今なお感ずることく、前足をあげて鼻の頭を二、三べんなでまわした。吾輩も少々気のどくな感じがする。ちつと景気をつけてやろうと思つて、

「しかし鼠なら、君にいらまれては百年目だろう。君はあまり鼠をとるのが名人で鼠ばかり食うものだから、そんなにふつとて色つやがいいのだろう。」

黒のごきげんをとるためのこの質問は、ふしぎにも反対の結果を呈出した。彼は喟然として大息していう。

「考げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——いつてえ人間ほどふてえやつは世の中にいねえぜ。人のとつた

鼠をみんな取りあげやがつて、交番へ持つてゆきあがる。交番じゃ、だれがとつたかわからねえから、そのたんびに五錢ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか、おれのおかげでもう一円五十錢くらいもうけていやがるくせに、ろくなものを食わせたこともありやしねえ。おい、人間でものあ体のいい泥棒だぜ。」

さすが無学の黒もこのくらいの理屈はわかるとみえて、すこぶるおこつたようすで背中を逆だてている。吾輩は少々気味が悪くなったから、いいかげんにその場をこまかして、うちへ帰つた。

このときから吾輩は、けつして鼠をとるまいと決心した。しかし、黒の子分になつて鼠以外のごちそうをあさつてあるくこともしなかつた。ごちそうを食うよりも寝ていたほうが気楽でいい。

【夏目漱石『吾輩は猫である(上)』(1906年7月 偕成社)による。】

(注1) 気焰＝燃え上がるような盛んな意気。

(注2) 御しやすい＝思うように扱いやすい。

(注3) お茶をにごすにしくはない＝こまかすのが最もよい。

(注4) 果然彼は、牆壁の欠所に吶喊して来た＝ここでは、予想どおり「黒」が誘いに勢い込んで乗ってきた、ということ。

(注5) 喟然として大息して＝ため息をついて嘆いて。

(注6) 交番へ持つてゆきあがる＝当時は、公衆衛生上、鼠退治を奨励し、とつた鼠を交番で買い上げた。

※ 問題は、次のページに続きます。

一 ―線部①「呼吸をのみこんだ」とありますが、この部分の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 コツをつかんだ。
- 2 息を吸い込んだ。
- 3 ため息を抑えた。
- 4 発言を我慢した。

解答欄

1

二 ―線部A「喝采してやる」、―線部B「とった」のそれぞれについて、「吾輩」の動作である場合は1、「黒」の動作である場合は2、「亭主」の動作である場合は3を選びなさい。

解答欄

A	B
<input checked="" type="radio"/> ① 吾輩	<input type="radio"/> ① 吾輩
<input type="radio"/> ② 黒	<input checked="" type="radio"/> ② 黒
<input type="radio"/> ③ 亭主	<input type="radio"/> ③ 亭主

三 ―線部②「反対の結果を呈出した」とありますが、このことは「黒」のどのような様子から分かりますか。【文章の一部】の中から探し、抜き出しなさい。

解答欄

例 彼は喟然として大息している。()
※「喟然として大息している」も正答。

例 すこぶるおこったようすで背中の毛を逆だ
てている
※「すこぶるおこったようす」、「背中の毛
を逆だてている」も正答。

※ 問題は、次のページに続きます。

四 【紹介】に〰〰線部「様々に評価する」とありますが、【文章の一部】では、「吾輩」は「黒」をどのように評価し、どのような接し方をしていますか。また、あなたは、そのような「吾輩」の接し方をどう思いますか。次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 【文章の一部】から、「吾輩」が「黒」を評価している表現を引用した上で、「吾輩」が「黒」にどのような接し方をしていることが分かるのかを書くこと。

条件2 条件1のような「吾輩」の接し方について、あなたの考えを具体的に書くこと。

※ 左の枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。

--	--	--	--	--	--

解答欄

例
1

「はなはだ御しやすい猫である」と評価しており、「吾輩」は「黒」の機嫌をとるような接し方をしていることが分かる。私は、このような「吾輩」の接し方はとても賢いと思う。

例
2

「腕力と勇氣とにいたってはとうてい黒の比較にはならない」と書かれていて、黒に敬意をもって接していることが分かります。相手の悪い面だけでなく、よい面にも目を向けることは大切なことだと思います。

例
3

「元来黒は自慢をするだけにどこか足りないところがあって」と相手を見下すような接し方をしている、あまりよい気持ちがない。